

# 広報

第18号

2018年  
(平成30年) 8月

## 目次

ご挨拶	1
新任教授紹介	4
受賞	5
国際交流	11
歯学研究院・教室紹介	12
行事紹介	15
新入生研修	22
海外留学報告記	24
特別寄稿	26
退任ご挨拶	29
訃報	32
北海道大学病院歯科診療センターのご案内	33
編集後記	35

北海道大学大学院歯学研究院・歯学院・歯学部・歯科診療センター



(本紙22頁参照)

## 広報誌ごあいさつ



北海道大学大学院歯学研究院長・歯学院長・歯学部長

八 若 保 孝

本年(2018年)4月より、3月まで北海道大学大学院歯学研究院長でありました横山教授の後を引き継ぎました八若保孝です。大学院歯学院長ならびに歯学部長を併任いたします。専門は、小児歯科学(子どもの歯・口に関する分野)と障害者歯科学(障害者の歯・口ならびに障害に関する分野)です。よろしくお願ひいたします。

北海道大学歯学部は、昨年創立50周年を迎えました。北海道における歯科保健・歯科医療の向上をはかり、広く地域社会の発展に寄与するという使命を担って1967(昭和42)年に誕生してから半世紀になります。この間、北海道大学の4つの理念である「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」を柱として、歯学部・大学院歯学研究院は、学生教育、研究、臨床を日々行い、多くの歯科医師、研究者、教育者を輩出してきました。

現在、教員組織である大学院歯学研究院は、口腔機能学分野、口腔健康科学分野、口腔病態学分野の3分野、20教室と、臨床教育部、学術支援部、国際歯科部の3部から構成されており、大学院生の組織である歯学院には、口腔機能学講座、口腔健康科学講座、口腔病態学講座、顎機能医療学講座、長寿口腔科学講座の5講座が設置されています。大学院歯学研究院と歯学院は、歯学に関する研究と大学院生の教育を中心とした活動を展開し、臨床系の教員および大学院生は、北海道大学病院歯科診療センターで診療にも従事しています。これらの活動を基礎として、歯学部で学生教育を行っています。病院に関しては、歯学部附属病院として北海道における歯科医療の発展、高度先進歯科医療を行っ

てきましたが、国の方針により、2003(平成15)年に医学部附属病院と統合して、北海道大学病院歯科診療センターとなりました。さらに、2013(平成25)年10月から現在の北海道大学病院新棟に移転し診療を行っています。これまでは、医科と歯科が離れていたため、疾患を有する患者さんの歯科診療が十分に行えない場合もありました。しかし、この移転により、医科歯科連携が円滑に進むようになり、包括的な歯科対応が可能となりました。このような状況の中で、歯学部学生の臨床実習、歯学部卒業後の臨床研修を中心とした臨床教育も充実してきています。日々の診療の他に、これまでの研究で得られた成果を基にした最先端の歯科医療の提供、さらに新しい知見のための臨床研究、専門医や学会認定医の養成などにも、積極的に取り組んでいます。

北海道大学歯学部は、創立以来の目標である「口腔の健康管理を通して、全身の健康管理に寄与し、ひいては人類の健康と福祉に貢献する」をいつも心がけ、教職員の不断の努力と学生の真摯な学びにより、前述した北海道の歯科医療への貢献にとどまらず、歯学教育、研究、臨床の多方面において、我が国の歯学における基幹学部、大学院、歯科診療センターとして成長してまいりました。ここ数年では、外国の大学との部局間交流協定が増加しており、昨年度は、バングラデッシュのサッポロデンタルカレッジ、ネパールのカドマンズ大学と協定を締結しました。さらに韓国の全北大学、スウェーデンのウメオ大学、中国の香港大学の学生が短期留学という形で歯学部に来年、今年、タイのマヒドン大学の大学院生が国際交流とし

て来学しました。このように国際性が徐々に進んできています。それから、他大学の教授、准教授に北大歯学部出身者が増えてきています。これらは、一朝一夕では成し遂げることができないことであり、先人たちの強い思い、的確な行動、未来を見据えた準備などの賜物と思えます。

人において「食べる」ことは、生きていく上で大切であり、さらに美味しいものを食べることにより心の安定も獲得できます。また、高齢者の方々の誤嚥性肺炎の予防などに必須である口腔ケアについてもその重要性が周知されてきました。「歯学」は人の健康を維持増進してい

くために必要な領域であり、学問です。北海道大学大学院歯学研究院・大学院歯学院・歯学部は、本年が次の50年の第一歩と位置づけ、札幌農学校二期生の哲学者、宗教家である内村鑑三が自らの経験から歯学について語った“Dentistry is a Work of Love.”という言葉の根幹として、社会へ貢献できる人材の育成、研究の遂行、高度で先進的な臨床などのあらゆる面で、さらなる発展を目指していきます。

私たち北海道大学大学院歯学研究院・大学院歯学院・歯学部へのご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

## 北海道大学歯学部創立50周年をおえて



北海道大学大学院歯学研究院（前研究院長）

横山 敦 郎

北海道大学歯学部ならびに北海道大学病院歯科診療センター（旧歯学部附属病院）は、平成29年に創立50周年を迎えました。昭和42年6月1日に、北海道の歯科保健・医療に貢献するという使命のもとに、北海道大学の最も新しい12番目の学部として設立されて以来、関係各位のご尽力と教職員の不断の努力によって発展を続け、平成12年に大学院重点化により歯学研究科に、昨年、平成29年4月には、大学院歯学研究科を教員組織としての歯学研究院と学生組織としての歯学院に分離、改組しました。現在、歯学研究院は、口腔機能学分野、口腔健康科学分野、口腔病態学分野の3分野20教室、ならびに学術支援部、臨床教育部、国際歯科部の3部から、歯学院は、口腔機能学講座、口腔健康科学講座、口腔病態学講座、顎機能医療学講座、長寿口腔科学講座の5講座から構成されています。加えて、昨年4月に分野横断型新学院として設立された医理工学院の教育にも本研究院の

教員が参画しております。

創立50周年にさいして、皆様のご協力のもとに歯学部内に北海道大学歯学部創立50周年記念事業準備委員会を組織して準備を進め、記念式典、記念祝賀会、記念誌発行の3つの記念事業に加え、北海道歯学会と協賛して記念講演会を企画しました。

平成29年9月30日に札幌グランドホテルにて記念講演会、記念式典、記念祝賀会を開催いたしました。記念講演会におきましては、本学同窓の福岡歯科大の石川博之先生、大学間交流協定校の韓国全北大学校歯科医学専門大学のアンズン先生、大学間交流協定校のデンマークオーフス大学のピーターズベンソン先生、本研究科ご出身のバングラディッシュサッポロデンタルカレッジのモヒュディンアーメッド先生にご講演を戴きました。記念式典では文部科学省高等教育局医学教育課長様、厚生労働省医政局歯科保健課長様、北海道大学総長よりご祝辞を戴

き、また、記念祝賀会は、約150名のご来賓のご臨席と約100名の歯学部教職員の出席のもと無事、成功裡に歯学部創立50周年記念事業をおえることができました。

北海道大学歯学部は、皆様の深いご理解、暖かいご支援とご協力を戴き、本年3月までに2,500名以上の卒業生を社会に送り出しております。本学部が創立されて以来今日までの50年の歴史は、偏に関係の皆様のご支援によ

るものと承知しております。記念事業が終了し、既に次なる50年、そして100年へ向けて動き出しておりますが、今後とも歯学研究の推進、歯学教育の充実、さらに歯科医療の進歩・発展に、教職員が一丸となって取り組む所存でございますので、引き続き北海道大学大学院歯学研究院、歯学院、歯学部、北海道大学病院歯科診療センターに、格別のご指導、ご鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。



記念講演会



記念式典



記念祝賀会

## 新任教授紹介



北海道大学大学院歯学研究院  
口腔病態学分野 血管生物分子病理学教室

樋田京子

### 【Bench to Bedの実現にむけて】

2018年5月、口腔病理学教室の4代目の教授に就任させて頂きました。なお、6月より教室名を血管生物分子病理学教室に変更いたしました。

私は北大歯学部（20期）を卒業後口腔外科に入局し、8年間臨床に従事しました。途中、大学院博士課程に進学し、口腔病理学教室において口腔がんの浸潤転移に関する研究を指導していただき博士号を取得しました。その後も口腔外科認定医資格を取得し口腔外科の臨床に従事しておりましたが転機が訪れました。夫が米国留学することになり2001年当時1歳だった双子達を連れて私も一緒に渡米したのです。その後米国ハーバード大学医学部でがんの血管新生（血管が新たにできること）を初めて提唱した Folkman 先生の主宰する分野で研究を行う機会に恵まれました。がんを兵糧攻めにすることによる新しいがんの治療薬、血管新生阻害剤がもう少して認可されようという時代でした。当時、がんの血管の特徴はあまり知られておりませんでした。私は腫瘍血管の内側に存在する腫瘍血管内皮細胞の分離と培養に成功し、その異常性を明らかにしました。腫瘍血管の正常血管との違い標的とするがんの血管により特異的な治療法の開発につなげたいと思い、また真理を探究する研究の面白さに目覚め研究者として生きることを決意しました。2005年に帰国後は口腔病理の助手にして頂き、その後、2009年薬学研究院のドラッグデリバリーシステムの専門家、原島先生のグループとの共同研究による研究費を獲得し血管生物学教室を開設させて頂きました。

た。2014年に遺伝子病制御研究所へ異動後も一貫して、腫瘍血管内皮の異常性のメカニズムを探る基礎研究と、その研究成果の新しいがんの診断・治療への応用を目指した橋渡し研究を平行して進めて参りました。

今後の抱負ですが、臨床病理に関しましては、前任の進藤正信先生が築かれた医学研究院、病院病理部との良好な関係を大切にして、口腔病理臨床業務はもちろん、口腔病理専門医の育成についてももしっかり務めて参りたいと思います。現在病理診断の分野においても、先端の研究成果が応用されはじめております。医学系の病理教室の先生方と連携し、ゲノム診断など新しい病理診断の導入も目指します。研究教育に関しましては、若い人達には独創的な最先端の研究に挑戦してもらいその成果を積極的に発信してもらおうよう励まし指導して参りたいと思います。教室には歯学研究院のほか、医学、生命科学の大学院生や留学生たちが多く在籍しています。また研究に興味を持ってかよってこられる学部学生もいらっしゃいます。今後も開かれた教室として多くの共同研究を進め、臨床の現場に研究成果を還元すること（Bench to Bed）を目指します。

最後に、超高齢化社会を迎えたわが国においては女性の活躍は今後ますます重要になります。私自身、これまで多くの方々に支えられ家庭と仕事を両立させて頂きました。今後は男女がともに協力しあって活躍できるような環境作りにも貢献してまいりたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## 受賞

## 学会賞受賞

受賞者：阿部 未来（学部6年、指導教員：硬組織発生生物学教室 網塚 憲生、長谷川智香）

受賞名：Student-Resident Poster優秀賞

受賞演題名：破骨細胞欠損マウスにおける骨モデリング領域の骨芽細胞の活性について

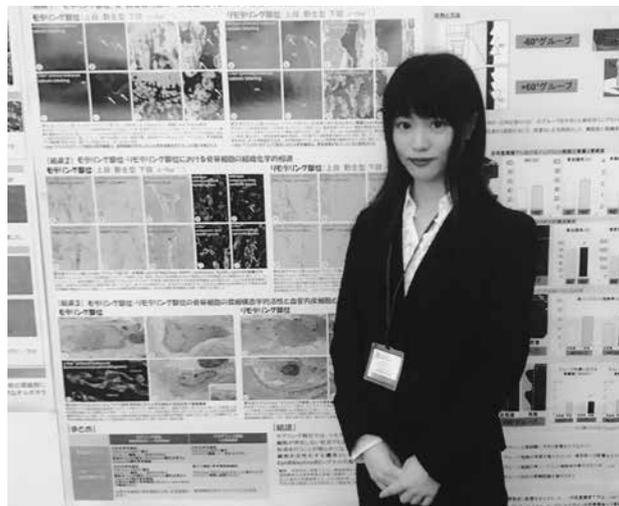
学会名：第35回日本骨代謝学会

受賞者：阿部 未来（学部6年、指導教員：硬組織発生生物学教室 網塚 憲生、長谷川智香）

受賞名：優秀論文賞 (Best Paper Award)、トラベリングアワード

受賞演題名：骨モデリングとリモデリング領域における骨芽細胞活性化の細胞学的機序—破骨細胞または血管内皮細胞との細胞連関—

学会名：第30回北海道骨粗鬆症研究会学術集会



この度、第35回日本骨代謝学会Student-Resident Poster優秀賞、ならびに、第30回骨粗鬆症研究会学術集会 優秀論文賞 (Best Paper Award)、トラベリングアワードをいただきましたことをご報告させていただきます。

当初、歯科医になることを志して歯学部に入学した私にとって、研究というのは近寄りがたく、また、一歯学部生である自分が関わることもあるとは思っていませんでした。しかし、網塚先生並びに硬組織発生学教室の先生方の研究に対する熱意、またその学会での発表に触れていく中で、多くの臨床は基礎がある上で成り立っているということを実感し、だんだんと研究の世界に強く惹かれていきました。

私の研究は破骨細胞の分化に必要な*c-fos*という遺伝子をノックアウトしたマウス、すなわち破骨細胞が存在しない*c-fos*KOマウスにおける

モデリング領域、骨リモデリング領域における骨芽細胞を観察するところから始まりました。すると、破骨細胞が存在しないにも関わらず、*c-fos*KOマウスでもモデリング領域の骨芽細胞は活性化しており、モデリング部位と骨リモデリング部位の骨芽細胞の活性化の機序は異なるのではないかと推測されました。さらに検索を進めていくと、モデリング部位の骨芽細胞の活性化には破骨細胞ではなく血管によるカップリングが関与しているのではないかと分かりました。組織を染色し、その形態をよく観察することで今まで分からなかったことが画像として見えてくる組織学という研究に魅了され、私は今もさらなる解析を組織染色や電子顕微鏡観察で進めており、また、新しいマウスを用いて別の研究も行っております。教科書で読んでいただけで鵜呑みにしていた事

実を形態として観察できること、また、まだまだ分からないことはたくさんあるということが分かりました。骨の学会において、歯学部だけでなく、様々な分野の方が様々なアプローチで研究に取り組みされており、これらの方々と交流し多様な視点を持つことができたというのもとても良い経験となりました。

これらは研究を知らないままの私であれば気

づくことのできなかった世界であり、今日の臨床を支えてくれている研究というものに一度触れてみるということは大切なことであると感じました。

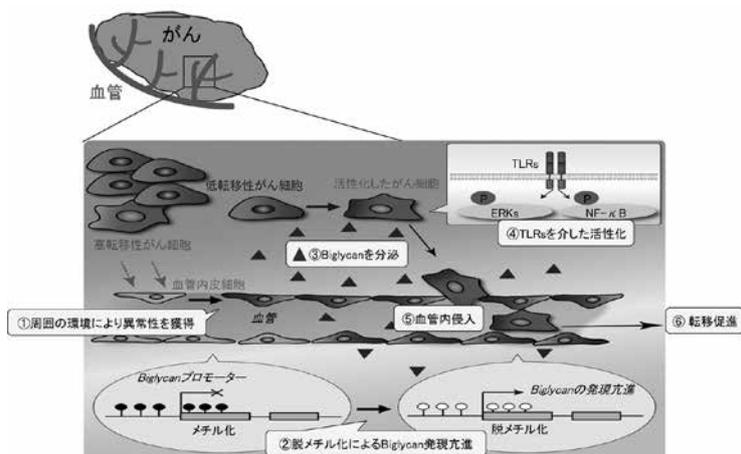
最後となりますが、私を研究という世界に導き、素晴らしい経験をさせてくださった網塚先生はじめ、硬組織発生学教室の皆様方に感謝申し上げます。

受賞者：口腔病理病態学教室（6月から血管生物分子病理学教室に名称変更）、特任助教 間石 奈湖

受賞名：第6回北海道癌談話会奨励賞（基礎系）

受賞演題名：Tumour endothelial cells in high metastatic tumours promote metastasis via epigenetic dysregulation of biglycan.

学会名：第116回北海道癌談話会



がんの血行性転移において、腫瘍血管は転移の関門になっている。我々はこれまで腫瘍血管内皮細胞TECが正常血管内皮細胞NECとは異なる性質を示すこと、さらに高転移性腫瘍由来TECは低転移性腫瘍由来TECよりも異常性を示すことから、TECが周囲の腫瘍細胞と相互作用し多様性を示すことを見出した。本研究ではより異常性の強い高転移性腫瘍由来TECががんの転移に関わる可能性について検討したところ、高転移性腫瘍由来TECはBiglycanを分泌

することにより、腫瘍細胞の血管内侵入という血行性転移の初期段階においてがんの転移促進に関与することを見出した。また、高転移性腫瘍内の血管内皮ではBiglycanプロモーター領域が脱メチル化されており、血管にもメチル化異常がみられることを発見した。本研究は、血管を中心とした新たながん転移メカニズムを示したものであり、さらにBiglycanを用いたがんの診断や治療薬の開発の可能性を示した。

受賞者：戸井田 侑（歯科保存学教室）

受賞名：Fusayama IAAD Acirntist Award THIRD PLACE

受賞演題名：Pulp Responses to Direct Pulp Capping Materials Contains Phosphorylated Pullulan

学会名：IAAD International Academy for Adhesive Dentistry)



歯科治療時において偶発的露髄に遭遇した場合、直接覆髄材によって治療を行うことがある。その際の材料として、Mineral trioxide aggregate (MTA) による直接覆髄の有用性が多数の報告されている。一方、歯質接着性を有さないため、処置後の辺縁漏洩を防ぐことが困難である。そこで、歯質接着性を有するリン酸化プルランを含有新規直接覆髄材が開発された。この新規材料のデンチンブリッジ形成能とその接着性について実験を行った。本材料はMTAと同等の

デンチンブリッジ形成能を示すことが組織染色によって明らかになった。また、象牙質に対して良好な接着性を示すことがSEMによる接着界面の撮影によって明らかになった。以上より、本材料は直接覆髄材として有用である可能性が示唆された。今後本材料応用性やデンチンブリッジの形成機序についてさらなる研究を行っていく。本学会受賞は多くの共同研究者の方々、当教室の先生方のご指導に基づく。この場を借りて謝意を示す。

受賞者：前田由佳利（口腔機能補綴学教室）

受賞名：デンツプライシロナ賞

受賞演題名：ミノサイクリンを担持したカーボンナノホーンの開発

学会名：日本口腔インプラント学会 第47回本部学術大会

カーボンナノホーン (CNHs) は直径2～5 nm、長さ40～50nmの炭素のみからなる新素材であり、その生体内安定性と薬剤担持能力から薬物輸送用担体として応用が期待されるバイオメディカル分野で注目を集めるナノ物質の一つである。当教室ではこれまでに、CNHsを固着したGBR膜は骨再生を促進することを報告しており、2年前には同じ研究チームの高田先生が、高機能化したインプラント材料の開発を

目的として陽極酸化チタン表面にCNHsを固着する方法を同学会にて発表し、同賞を受賞されている。本研究においては、インプラント周囲炎に頻用されるミノサイクリン (MC) をCNHsに担持させることにより、インプラント周囲炎の消炎および周囲骨の再生に応用することを目的とした。

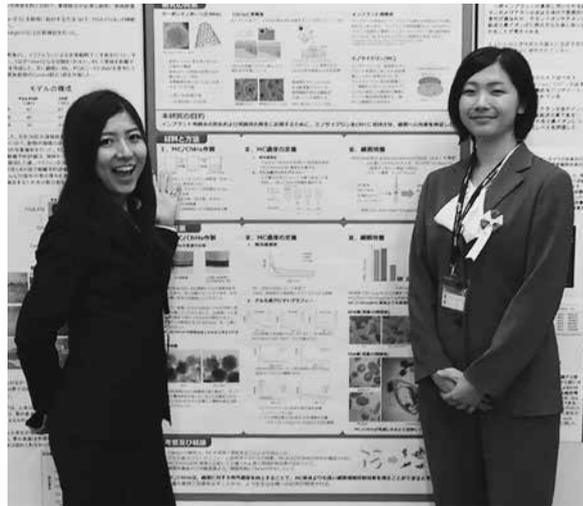
550℃にて大気酸化処理を行ったCNHsと、MC塩酸塩水溶液を混和後、超音波分散を行

い、MC/CNHs水溶液を作製した結果、通常不溶性であるCNHsの分散性が向上した。

またA.a菌を用いて細菌培養を行ったところ、MC/CNHsはMC単体と同様の静菌性を発揮することが確認された。MCがCNHsに担持されることでCNHsの分散性が増加し、高い水

溶性を示すMC単体と同等の静菌性を示したものと推測された。

今後はCNHsの処理方法等を検討することで、さらなる効果の増強を図るとともに、CNHsとMCの相互作用についての解明を進めていきたいと考えている。



受賞者：長谷川智香（硬組織発生生物学教室）  
 受賞名：日本骨粗鬆症学会 2017年度（第16回）研究奨励賞  
 受賞演題名：FGF23/klothoシグナルによる基質石灰化制御機構の解明  
 学会名：一般社団法人 日本骨粗鬆症学会



一般社団法人日本骨粗鬆症学会より、2017年度（第16回）研究奨励賞を頂戴いたしました。本賞は、骨粗鬆症関連疾患の基礎及び臨床研究の発展・進歩に将来大きく寄与する独創的な研究を継続することが期待できる新進の研究者へ

の助成・援助を目的として設立されたものです。今回、このような榮譽ある賞をいただき、大変光栄に思っております。

受賞対象である基質石灰化制御機構解明の研究は、私にとって大学院時代から継続して取り

組んできた思い入れのある仕事であり、また、骨・歯などの硬組織研究を主体とする歯学領域の諸先生方が牽引されてきた重要な領域でもあります。今後も、基質石灰化制御機構の全貌を明らかにすべく、日々精進してまいりたいと思います。なお、これらの仕事は、国内外の多く

の共同研究者の先生方、そして、所属する硬組織発生生物学教室の網塚教授や諸先生方の御協力の元、遂行しております。この場をお借りして、御指導ならびに御支援下さったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

**受賞者：**田中 佐織（歯周・歯肉療法学教室）

**共同演者：**宮治裕史、西田絵利香、A. Joseph NATHANAEL<sup>2</sup>、中村真紀、大矢根綾子、田中 享、飯田俊二、高師則行、井上 哲

**受賞名：**優秀ポスター賞

**受賞演題名：**レーザー援用バイオミメティック法によるレジン表面の改変とアパタイト形成能評価

**学会名：**第10回日本総合歯科学会学術大会（2017.11. 3-4 新潟）



昨年の11月、新潟で開催されました第10回日本総合歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞を頂戴致しました。

このような賞を頂くのは初めてのことで、大変感激致しました。

副賞は主婦には嬉しい新潟産のコシヒカリ新米でした。

本研究は、北大と産総研との共同研究です。日々ご指導、御協力してくださった諸先生に心から感謝申し上げます。

発表内容は、レジン表面をbioactivityが大きいとされるアパタイトでコーティングし、細胞増殖に適切な環境をつくり、そこに大量の細胞

供給をすることによりレジン上に歯周組織再生を実現するための基礎的研究です。

これまでにレジン穿孔部の封鎖や逆根管充填に、最近では垂直歯根破折歯の接着治療に用いられています。

これら治療の成功率向上のために、レジン上に歯周組織再生を目指しさらなる検討を行います。

第10回日本総合歯科学会，新潟大学 駅南キャンパスときめいと（新潟市），平成29年11月3-4日，プログラムおよび講演抄録集，166（P98），2017.

## 第72回（平成29年）国民体育大会・愛媛国体に参加して

大学院歯学院（口腔機能解剖学教室）  
国民体育大会ライフル射撃競技 北海道代表  
柳 あさこ

北海道代表として5回目の国民体育大会を終えました。国民体育大会は公式練習と本戦を合わせると一週間ほどの遠征です。宿は毎年、大会本部から指定されます。北海道チームは愛媛県内子町にある素敵な宿に割り振られ、豪華な食事と共に充実した大会期間を過ごすことができました。

昨年、一昨年と副種目・伏射で入賞し、国体特有の大きな賞状を頂くことができました。しかし本種目である立射で入賞することが出来ず、今年は2種目入賞することを目標に練習を重ねました。

公式練習から程よい緊張感に包まれ、チームの選手と協力し合いながら本番を迎えることができました。立射を終え掲示板に向かうと、入賞圏内に自分の名前を見つけました。嬉しさよりも、安堵感が大きかったように思います。伏射も安定した射撃ができ、結果として以前から目標としてきた2種目入賞を果たすことができました。さらに嬉しいことがありました。射撃競技において北海道が28年振りに天皇杯8位を獲得したのです。天皇杯は都道府県の男女総合成績によって決められます。微力ながら北海道

のポイント獲得に貢献できたことを大変嬉しく思います。

関東の山奥に移住し、本格的に競技活動を開始してから、今年の6月で2年が経過しました。毎朝規則正しく起き、体の調整を行い、勤務の日は病院へ、それ以外の日は射撃場へ移動します。試合が近づくと、以前は不安に苛まれました。しかしメンタルトレーニングのお陰か、今は比較的落ち着いた精神で、その日取り組むことに全力を注げるようになったと感じています。最近は解剖学を大切にし、骨格について熟考しながら姿勢構築をしています。いかに生理的な反応をコントロールするか、(苦手な)生理学についても考えを巡らせています。毎日真剣に、楽しく、全力で取り組む課題があることを幸せに感じます。

今回の国民体育大会は福井県で開催されます。現在予選中です。今年は種目を変更し、装薬銃である22口径ライフル（スモール・ボア）での出場、および上位入賞を狙います。

最後までお読み頂きありがとうございます。



# 国際交流

## 歯学部・歯学研究院・北大病院歯科診療センターの 国際化・国際交流

昨年度(平成29年度)の歯学部・歯学研究院・北大病院歯科診療センターにおいて実施されました国際交流について報告いたします。

5月18日、香港大学と国際交流姉妹校、部局間交流協定を結びました。ここ数年間特に当研究院、井上 哲教授を中心として学部学生間での交流がなされてきており、当日は横山敦郎歯学部長、有馬太郎准教授、柴田 仁事務長、藤野智彦庶務係長で香港市へ向かい、調印式、学術交流、懇親会を行いました。香港大学は当時、歯学部として世界ランク(QS World University Rankings by Subject 2017 - Dentistry) 第1位であり、このように高名な大学と姉妹校となったのは大変光栄でありました。

5月31日、前年度末にスウェーデン・ウメオ大学へ約3週間留学しました、当時学部学生でありました丸岡春日先生、三浦和仁先生が当部局スタッフの前で留学の報告会を行いました。横山敦郎歯学部長と井上 哲教授を中心として行われたプログラムでした。相手先大学学生との国際交流が密に行われている様子が紹介されました。

7月17日から8月2日にかけて北海道大学サマーインスティテュート(北海道大学が主催するサマースクールのことで、本学のスーパーグローバル大学創成プロジェクト(日本学術振興会支援)の一部)が開催され、本学より5教科

が提供されました。今年も佐野英彦教授、横山敦郎教授、有馬太郎准教授を中心として開催されました。海外より世界のトップランナーたちが講師として来訪、本部局教員と共に英語による教育を大学院生に提供しました。

9月30日、北海道大学歯学部創立50周年式典が開催されました。海外より、

- Prof. Ahn Seung-Geun, Dean and Professor, Department of Prosthodontics, School of Dentistry, Chonbuk National University, Korea. Title: "Prosthodontic treatment for elderly patients with complex problems"

- Prof. Mohiuddin Ahmed, Professor and Principal, Department of Oral & Maxillofacial Surgery, Sapporo Dental College & Hospital, Bangladesh. Title: "Management of aggressive benign lesions of jaw - Our experience in Bangladesh"

- Prof. Peter Svensson, Professor and Head, Section of Orofacial Pain and Jaw Function, Department of Dentistry Faculty of Health, Aarhus University, Denmark. Title: "Progress in oral health and pain research over 50 years - where are we going now?"

と3名の先生が本学を訪問くださり、上記タイトルでご講演されました。どなたも本部局と長年に渡って親密な交流を続けてくださっている



香港大学との部局間交流協定



サッポロデンタルカレッジとの部局間交流協定

方ばかりで、ご講演の途中で本学教員との昔懐かしい思い出の写真などを紹介されました。

10月末より、国際総合入試に本学部より試験監督員が1名派遣されました。これは国際化への能力をもった学生を積極的に本学へ入学させるための新しい入学試験です。

11月28日から12月1日の間、香港大学より歯学部学生が1名短期留学に訪れました。近年、海外より本学部教育に参加するケースが多く、本学部の受け入れ体勢も整ってきており、簡単に既存の学部授業に本留学生を組み込み、英語での講義や実習を行うことができるようになりました。また本学部学生らも海外の学生と積極的にコミュニケーションをとってくれており、大変助かっています。

11月28日から12月8日の間、スウェーデン・ウメオ大学より学生2名と教員1名が本学を訪れ上記同様、本学部教育に参加しました。教員とは来年度以降の交換留学の充実に関する会議を重ねました。

平成30年1月28日より一週間、韓国・全北大学より学生3名と教員1名が本学を訪問、本学部教育に参加しました。こちらも毎年数回行われる恒例行事となってきました。

2月、本学部学生でありました高橋静香研修医、小林博和研修医がスウェーデン・ウメオ大学を訪れ、現地の教育を受けました。2月16日には本研究科より教員（井上 哲教授、有馬太郎准教授）が訪問、講義を行いました。本事業は今年度も行います。

2月27日、バングラディッシュ、サッポロデンタルカレッジと部局間交流協定締結を行いました。横山敦郎歯学研究科長とともに調印されました。今回の調印により研究者、特に大学院生が相手先へ留学する環境が整いました。

以上、大規模な交流のみ報告しましたが、個々の国際交流も多く行われています。今年度も予定はすでに組まれており、昨年度以上に盛り上げていきましょう。

## 歯学研究院・教室紹介

### 【口腔顎顔面外科学教室】

みなさんこんにちは。私たちの教室を紹介します。名前が示すとおり、私たちの教室では、口の中、上顎、下顎、顔面にできるさまざまな病気を手術によって治療しています。とり扱う病気は唇顎口蓋裂(先天性の病気)、顎変形症(あごの発育異常によってかみ合わせが悪い状態)、口腔がん(口の中のいろいろなところにある癌)、良性の腫瘍(口の中やあごにできるおできのようなもの)が主なものです。放射線治療の後遺症としての放射線性顎骨壊死、原因不明の骨髓炎、骨粗しょう症などの治療薬によって起こる骨髓炎も治療します。もちろんインプラントの手術や、インプラントを入れるための準備の手術も行います。抜歯は日常的にとり扱う

頻度の高いものです。抜歯には虫歯がひどくなって抜くものから親知らずや顎骨のさまざまな位置にある過剰な埋伏歯(萌出しないであごの中に埋もれている歯)があります。これらの治療は患者さんの身体に及ぼす影響の大きさなどにより、外来において局所麻酔で行うのか、入院下に全身麻酔で行うのかを判断しています。

教室は教官9名以下、医員、大学院生、研修医を含めて総勢40名です。これら40名で学部生・大学院生の教育、外来診療・入院診療・関連病院での診療、研究を行っています。診療において、他の教室と大きく違うところは入院ベッドをもっていることです。365日、常に入院患者がいますので、教室の先生達は休日でも

日直や患者の診療のために出勤しています。また当然ながら当直もあります。手術のある月、火、木はとくに患者の術後の容態の変化が気になるため、帰宅は午前様になることが普通です。このように厳しい勤務状態のため、最近は学生に人気がなく、口腔顎顔面外科はブラック企業といわれているのが残念です。

大学院生は主として基礎の教室で研究しています。口腔病理病態学教室、細胞分子薬理学教室、硬組織発生生物学教室などをお願いして研究させていただいています。大学院3年生には中国上海交通大学からやってきた趙 申君がいます。また、来年度はベトナムの女性歯科医 Nguyen Thi Trangさんが大学院入学予定ですので、歯学研究院の国際化に少しは役立っているかもしれません。

教室の先生達は、国内・国際学会で多くの研究発表をこなしています。それに加え、私たち

の教室では4年前から台北医学大学口腔外科と6か月ごとにお互いの土地を訪れ、口腔顎顔面外科合同シンポジウムを開催しています。7回目が4/12-15の日程で、台中で行われましたが、台湾の先生方との知識や経験の交換のみならず、英語での発表は若手の先生にとっては国際学会への登竜門としていい刺激になっています。

年に2回、教室の有志で手稲・小樽間を走っています。このクラブを「らくらくクラブ」といいます。走る距離は22-23kmですが、この間は多くが登りと下りで大抵は脚をやられてしまいます。走れる人は走って、走れなくなったら歩くかもしくは伴走車に乗る、走り終えたあとは温泉に入ってビール。こんな催しをやっていきます。

日々忙しい教室ですが、忙中閑あり、それを楽しみに教室員一同頑張っています。



集合写真

## 【口腔分子生化学教室】

皆さま、こんにちは。歯学研究院の口腔分子生化学教室を紹介します。歯学部には、歯科診療センターでの歯科医療に携わる臨床系の研究室と歯科医療に直接携わらない基礎系の研究室

があります。口腔分子生化学教室は、後者の基礎系の研究室の一つです。基礎系の研究室は、一般の方々からはなじみのないところで、時には「なぜ歯科医療をしてくれないのですか」と

いうお問い合わせをいただくこともあります。現在、教員3名と事務スタッフ1名（1名だけが男性、その他は女性）が在籍し、以下に述べる歯学部・歯学院（大学院）の教育と研究を主に担当しています。

### 口腔分子生化学教室の担当する教育

歯学部の学部教育では、歯科疾患の診断と治療を学ぶうえで必要な人体の構造としくみを学びます。そのなかでこの「生化学」とは、ヒトの生体を構成するさまざまな物質（タンパク質、糖質、脂質、核酸など）とその作用を化学の面から解析して、生命現象を解明しようとする学問分野です。歯学部の学生には、このような学問分野の講義と実習を行っています。歯科医師を目指す学生にとって必須の領域で、疾患とその治療法の理解のための基盤となる知識を習得してもらいます。遺伝子診断やテーラーメイド医療、遺伝子治療など医療の進歩は著しく、新たな診断法や治療法が研究・開発され臨床に用いられるようになりました。将来の医療を担う学部学生にとってこのような最新医療に対応するためには、生化学・分子生化学の基礎的な知識の習得が欠かせなくなっています。

### 口腔分子生化学教室で行っている研究

歯学部では、歯の研究をしていると皆さん想

像されていると思いますが、必ずしも歯だけを研究の対象として扱っているわけではありません。歯と密接な関係のある硬組織である骨・軟骨や血管などの軟組織も口腔を形成する重要な組織です。研究室では、これら口腔の諸組織の機能にかかわる分子の構造と機能について研究を行っています。最近では、骨が産生するタンパク質であるスクレロスチンが脂肪細胞の形成・分化を促すことを見出しました。これまで体を支えるだけの組織と考えられてきた骨が、内分泌組織として全身の他の組織を調節する役割を担っている可能性について研究成果を論文発表しています。また、骨形成や石灰化に関する研究、ES細胞を用いた血管形成に関する研究、脂肪組織に関する研究などいくつかのテーマの研究を行っています。このような研究は、教員だけでなく大学院生や学部学生も参加して、研究を通してさまざまなことを学んでいます。研究は、これまで世界中の誰もがわからなかった新しいことを見出す過程です。ですから、必ずしも思い通りの結果が出ることばかりではありません。思うようにいかないことも多くありますが、研究において新たな発見をすることは研究者にとってはとても嬉しいことです。本研究室では、このような研究によって生命現象の未知の課題を明らかにし、将来の新たな医療のもととなる知見を得ることを目指しています。



口腔分子生化学教室の教員

## 行事紹介

歯学研究院・歯学院が香港大学牙医学院と  
部局間交流協定を締結

歯学研究院・歯学院は、平成29年5月18日(木)、香港大学牙医学院と部局間交流協定を締結しました。

香港大学で開催された調印式には、歯学研究院から横山敦郎研究院長、有馬太郎准教授ら4名が赴き、香港大学からはThomas Flemmig学院院长、朱振雄副学院長をはじめ、関係者多数が参加して行われました。

香港大学は、QS World University Rankings by Subject 2017の歯学分野で、世界第一位にランクされており、世界をリードする研究と優れた教育で多くの優秀な人材を世界に送り出しています。

昨年10月には32名の香港大学歯学部学生を受

け入れ、北海道大学病院歯科診療センター、歯学部学生実習や講義風景の見学、留学生事情の説明など、本学教員や学生との交流行事を開催したことが契機となり、本協定の締結に至りました。なお、今年度は4名の歯学部学生(5年生)を受け入れ、昨年度とは異なったプログラムで一週間訪問し、研修を行いました。

調印式でThomas Flemmig学院院长は、協定締結は新たな関係の始まりであり、両校のこれからの交流発展を願う旨述べられました。今後は、本協定に基づき、国際共同研究の実施や教育研究における交流連携が一層推進されることが期待されます。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)



調印後のThomas Flemmig学院院长(左)と  
横山敦郎研究院長



調印式参加者の集合写真

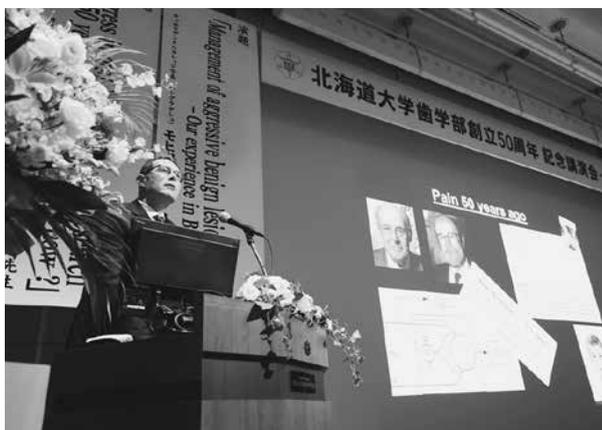
## 歯学部創立50周年記念事業 (記念講演会、記念式典、記念祝賀会) を開催

歯学部は昭和42年6月1日に創立され、本年で創立50周年を迎えました。これを記念して、9月30日(土)に札幌グランドホテルにおいて歯学部創立50周年記念事業を開催し、全国及び海外から250名を超える関係者にご参加いただきました。

北海道歯学会との共催による記念講演会では、横山敦郎歯学部長の挨拶の後、石川博之福岡歯科大学長から「近年の矯正歯科治療の潮流」、アン・スングン全北大学校歯医学専門大学院長(大韓民国)から「Prosthetic treatment for elderly patients with complex problems(複雑な補綴的問題を併せ持つ高齢者に対する補綴治療)」、モヒュディン・アーメッド・サッ

ポロデンタルカレッジ学長(バングラデシュ)から「Management of aggressive benign lesions of jaw - Our experience in Bangladesh(顎骨に発症した侵攻性良性疾患の管理-バングラデシュにおける我々の経験から)」、続いて、ピーター・スベンソン・オーフス大学教授(デンマーク)から「Progress in oral health and pain research over 50 years - where are going now?(過去50年における口腔保健と疼痛に関する研究の進歩-我々はどこに向かっているのか?)」と題し、4題の記念講演が行われました。講演会終了後には横山敦郎歯学部長から講演者に感謝状が贈呈されました。

記念式典では、横山敦郎歯学部長から式辞が



記念講演会：ピーター・スベンソン教授による講演



記念式典：式辞を述べる横山歯学部長



記念式典：挨拶をする名和総長



記念式典：祝辞を述べる森文部科学省医学教育課長



記念式典：祝辞を述べる田口厚生労働省歯科保健課長

述べられ、名和豊春総長のご挨拶の後、森孝之文部科学省高等教育局医学教育課長及び田口円裕厚生労働省医政局歯科保健課長からご祝辞をいただきました。引き続き、戸谷一夫文部科学事務次官、高橋はるみ北海道知事及び秋元克広札幌市長からの祝電が披露されました。

記念式典終了後、会場を移して記念祝賀会が行われました。北川善政北海道大学病院副院長から主催者挨拶、藤田一雄北海道歯科医師会会長及び富田喜内名誉教授から来賓挨拶をいただき、鏡開きが行われた後、村井清彦北海道大学歯学部同窓会長による祝杯により祝宴が始ま



記念祝賀会：会場風景

りました。和やかな雰囲気の中、山田尚札幌歯科医師会会長及び雨宮璋名誉教授からご祝辞をいただき、祝電披露の後、『写真で振り返る50年』と題したスライド上映では、歯学部創立当初から現在までの歴史が紹介され、参加者一同が見入っていました。最後には、大畑昇名誉教授のご発声により「都ぞ弥生」を参加者全員が輪になって斉唱し、福島和昭名誉教授の乾杯で盛会のうちに終了しました。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)

## 歯学研究院で「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革」 平成29年度連携シンポジウム in 札幌を開催

歯学研究院では、11月10日(金)～11日(土)の2日間にわたり、「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革」平成29年度連携シンポジウム in 札幌を開催しました。

本シンポジウムは、我が国が抱える医療現場の諸課題等に対し、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材の養成等を目的とした文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」の選定事業の一環として開催されたものです。平成26年度に、本学を含めた全国11の国立大学及び私立大学の連携事業として選定され、歯学教育改革の高度化を図るとともに、年に一度連携シンポジウムを開催しています。

11月10日(金)のシンポジウムでは、横山敦郎歯学研究院長及び本事業責任者である窪木拓男岡山大学教授からの挨拶の後、「これからの医科歯科連携教育」をテーマとし、黒澤修身文部科学省高等教育局医学教育課課長補佐及び笠原正典本学理事・副学長から講演が行われました。また、同日夜には懇親会が開催され、連携校の歯学部及び歯科大学との相互交流がなされました。

翌日午前中のシンポジウムでは、井上哲本学大学院歯学研究院教授が座長となり、「地域包括ケアと周術期口腔管理」をテーマとして、山崎裕本学大学院歯学研究院教授、秦浩信北海道

がんセンター歯科口腔外科医長、小谷勝北海道  
歯科医師会常務理事、宮田靖志愛知医科大学地  
域医療教育学寄附講座教授から講演が行われま  
した。午後は、「オーラルフレイルとは：老年  
学の視点から」と題した、平野浩彦東京都健康  
長寿医療センター歯科口腔外科部長の特別講演

が行われました。

各講演終了後には、これからの歯学教育のあ  
り方、各大学・医療機関で実施されている診  
療・取組等に対し、活発な質疑応答がなされ、  
活況のうちに閉会となりました。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)



講演する黒澤課長補佐



講演する笠原理事・副学長

## 歯学研究院で「動物供養祭」を挙行

歯学研究院では、11月27日（月）午後4時30分から、学部会議室において、動物供養祭を執り行いました。供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（ラット、マウス計1,245体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約20人が参列しました。

供養祭では、最初に横山敦郎歯学研究院長か

ら挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の船橋誠教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文（さいもん）」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



参列者に挨拶する横山研究院長



「祭文」を読み上げる船橋委員長



献花する参列者

## 歯学研究院で自衛消防訓練を実施

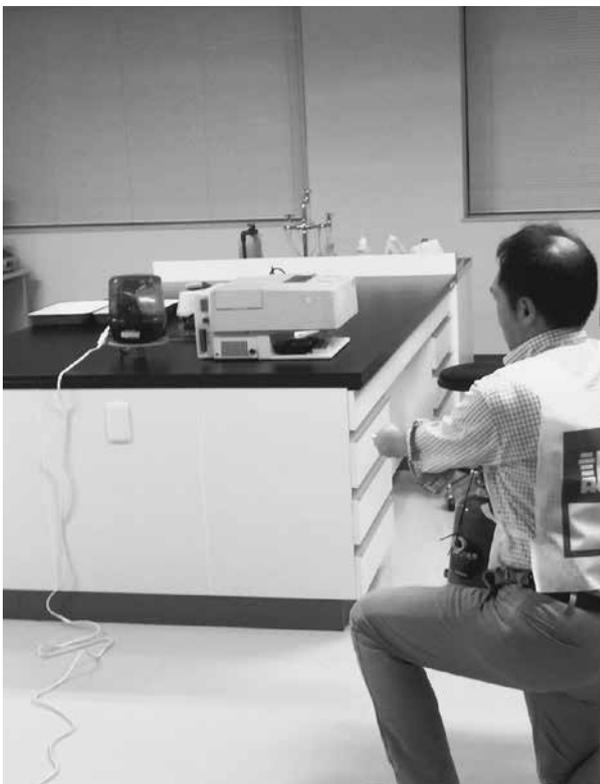
歯学研究院では12月7日（木）に自衛消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、C棟5階実験室から夜間に出火したとの想定で、自衛消防隊長である横山敦郎歯学研究院長の指揮により、各班に分かれ、自衛消防隊による通報連絡、避難誘導、初期消火、教職員に対する安否確認等の訓練を実施し

ました。

訓練終了後、横山研究院長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時にはこの訓練を思い出して行動して欲しい。」との講評がありました。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



消火器操作訓練の様子



研究院長による講評

## 歯学研究院・歯学院がサッポロデンタルカレッジと 部局間交流協定を締結

歯学研究院・歯学院は、平成30年2月27日(火)、サッポロデンタルカレッジと部局間交流協定を締結しました。

バンングラデシュ・ダッカ市内で開催された調印式には、歯学研究院から横山敦郎研究院長、鄭漢忠教授、有馬太郎准教授ら5名が赴き、サッポロデンタルカレッジからはMohiuddin Ahmed学長をはじめ、在バンングラデシュ日本国大使館、バンングラデシュ政府高官及びダッカ大学医学部等の関係者が多数参加して行われました。

サッポロデンタルカレッジ (Sapporo Dental College, University of Dhaka) は、Mohiuddin Ahmed学長をはじめ、本学に留学し、学位を取得した口腔外科・保存・補綴・矯正・病理を

専門とする同志により、バンングラデシュの歯科医学・医療の発展と人材育成を目標に掲げ、2000年に設立されました。

調印式でMohiuddin Ahmed学長は、協定締結は新たな関係の始まりであり、両校のこれからの交流発展を願う旨述べられました。今後は、本協定に基づき、国際共同研究の実施や教育研究における交流連携が一層推進されることが期待されます。

また、バンングラデシュ訪問中には、在バンングラデシュ日本国大使館大使公邸に招かれ、泉裕泰特命全権大使等とのバンングラデシュにおける教育・社会事情について情報交換が行われました。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)



調印する横山研究院長(左)とAhmed学長



調印式参加者の集合写真



サッポロデンタルカレッジ視察の様子



在バンングラデシュ大使館大使公邸にて

## 2018年度新入生合宿研修

### 歯学部合同合宿で感じたこと

歯学部五年 榎 谷 賢 太

先日、私は学友会の一員として歯学部合同合宿に参加した。歯学部では新入生のために毎年四月初旬に合宿を行い、新入生が上級生および先生方と親睦を深める。新入生はこの機会に、時間割を作るのを上級生に手伝ってもらったり、歯学部の授業の仕組みなどを先輩方から教わったりする。一方で上級生は新入生を自分の部活に入れようと必死に勧誘する。お互い目的は違えど、聞きたいこと、話したいことがあるので、思いのほか話は盛り上がる。また入学したばかりの新入生は大学生活に大きな夢と希望を抱いており、先輩の私どもに、将来はこんな歯科医師になりたい、こんな研究をしたいと純粋な眼差しで熱く語ってくれる。学年が上がって行くに従って、現実を知り、夢を諦めてしまったりする学生も多いように思える。しかし合宿に参加して、そのような話を聞くたびに、自分もそういう純粋な気持ちを忘れずに日々勉強に励まなくてはいけないなと思い知らされる。

こんな自分も四年前は新入生として合宿に参加し、先輩方や先生方に熱く夢を語っていたのだろう。当時自分が描いていた歯科医師という職業と、五年生の今自分が持っている歯科医師像は全く異なる。しかし一つ言えることがあるとすれば、入学当時より今の方が歯科医師という職業に対する尊敬の念は強い。歯学部に入學したものの、親族に歯科医師がいない私にとっては歯科医師という職業はとても遠いものであった。きっと4年前の自分にとって先輩方や先生方の話している内容も遠い未来のことで、まるで自分のことではないようだった。先生方が新入生の前で話している内容も、通過儀礼のようにしか思えず、内容など全然頭に入ってはこなかったことだろう。歯学部にいながら、自分が歯科医師になるとは全く思えなかった。

しかし上級生として参加して改めて話を聞くと、考えさせられることも多い。五年生になり臨床実習が始まり、いよいよ国家試験も意識し



始めると、自分の将来についても考え始める。卒業したあとは大学院に行くべきか、勤務医になるべきか、基礎研究に行くべきか、臨床に行くべきか…。自分にはそれを判断するための確かな知識はまだ無いだろう。しかしかつてこれと似たようなシチュエーションになり、そして歯科医師になるという決断をしたことがあるのも事実である。実際、私が高校三年生の頃、今と同じように将来の進路に悩んでいた。私には若干18歳にしてこれから死ぬまで働く職業を選ばなくてはならないという受験はとても不条理なものに思われた。そして今私はかつてのように、確かな知識もないまま進路を選ぶことになってしまうのだろうか。絶対にこのような歯科医師になりたいという目標を持って進路が決まっている学生は少数派ではないだろうか。むしろ自分のようになんとなくの将来像は描けるが、具体的にどのような進路を選ぶか分からないという学生は多いはずだ。

だが私はそのようなことを言いながらも、自分が歯科医師という職業を選んだことを後悔したことは一度もない。そしておそらく卒業後の進路を選ぶときに、どの進路をとろうが同じく私は後悔することはないだろう。なぜならば、人生において大事なのはどの道を選んだかでは

なく、選んだ道でどう生きるのかだからと私は思うからである。私はどのような職業であれ、その道のプロフェッショナルに対して尊敬の念に堪えない。もちろん自分の興味がある進路を選ぶのは大前提であるが、その道のプロフェッショナルになるということだけ決めておけば、どの進路にせよ私は後悔することはないはずだと思っている。

このように合同合宿で新入生をみて、時の流れは早いなと感じながら、自分の進路について思いを馳せていた。五年生という学年は社会では就職して働いていてもおかしくない年齢である。自分の周りの友人が働いているなか、未だに学生として過ごしている自分に対してやるせない気持ちになることがある。私はまだ社会にたいして何の貢献もしていない。また国立大学にいる以上、税金を使って勉強をさせてもらっている立場でもある。1人の歯科医師を作るためにおおよそ5000万円の費用がかかると聞いたことがあるが、私はその十分の一のお金も払っていないわけだ。医療従事者として、そのような立場におかれて勉学をさせてもらっている者として、謙虚な気持ちを忘れずにこれからも勉学に励み、少しでも社会貢献することができればなと感じた四月某日であった。

## 留学から戻って～心をかかわす研究～

大学院歯学研究院 口腔分子生化学教室

佐藤 真理

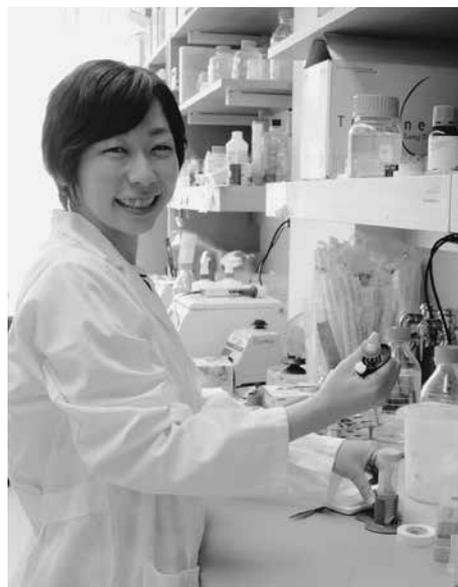
私は2015年6月から2017年7月までの2年間、サンスター財団の留学支援によりアメリカ・ボストンにあるハーバード大学医学部・ジョスリン糖尿病センター（以下ジョスリン）で研究を行ってきました。研究者、歯科医師、そして人間として私をがらりと変えた留学ですが、ここではアリソンとショーンのことをお話ししたいと思います。

アメリカ人のアリソンは、私がいた研究室の秘書さんです。ボスの書類仕事の手伝いや実験に必要な物品の注文などをしてくれます。気さくで優しいアリソンは、英語が苦手な私にもよく話しかけてくれて何かと助けてくれました。2017年の4月、アリソンに大変なことがあったと青ざめたボスが研究室にやってきました。アリソンの息子のショーンが意識をなくしてICUに運ばれたとのことでした。アリソンの末の息子のショーンは、産まれてすぐに先天的にインスリンが作れない1型糖尿病と診断され、幼い頃からジョスリンの病院に通い血糖値をコントロールしてきました。1日に何度も針で指を刺して血糖値を測り、インスリンを注射して・・・小さな子供にはつらいことが多く、母親であるアリソンも大変な思いをしたそうで

す。しかし、家族みんなでショーンの1型糖尿病に向き合い、ジョスリンのスタッフと適切な治療をしてきたので、ショーンは元気に育ち健康な子と同じような生活をしていました。大学に入り、寮で暮らし、フットボール部で活躍しながら勉強にも励み、大学生活を謳歌して2017年の5月には卒業を控えていました。しかし、卒業前の最後のフットボールの試合とパーティーがあった翌朝、糖尿病性昏睡で寮の部屋で意識を失くして倒れているところをルームメイトが発見されました。すぐにジョスリンの向かいの病院のICUに運ばれましたが、残念ながら回復は難しく死亡する可能性が高いとのことでした。アリソンが大好きな私たちは皆、非常にショックを受けました。ボスが言うには、アリソン一家はひどく落ち込んでいるけれど、皆に病院に来てもらって元気づけて欲しいとのことでしたので、すぐに皆で病院に行き、泣きはらしたアリソンや旦那さんを何度も抱きしめて悲しみをシェアしました。ICUにも行き、意識



We love SEAN



実験風景

のないショーンの冷たい手を握りました。ショーンの傍には、インスリンの注射をする時に泣くのを我慢するためいつも抱きしめていたという古びたティディベアが置いてあり、幼い頃から糖尿病と生きてきた彼の人生をまざまざと感じました。糖尿病研究に携わっている私たち研究者にとって何とも悲しいこの現実には、誰もが下を向いて自分の無力さを感じていました。そんな私たちに、アリソンが「見せたいものがあるの。」と言って私たちを病室の外の大きな窓まで連れていきました。そこからは病院の向かい側にあるジョスリンが見えます。そしてジョスリンの窓には「We ♥ SEAN (ショーン)」と書かれた大きな紙が貼られていたのです。「ジョスリンはどんな時でもずっと私たちの味方でいてくれる。だから私もショーンも大丈夫、いつだって頑張れる。」と、やつれたアリソンは微笑みました。私は胸がいっぱいになりました。

小さな頃からジョスリンに通っていたショーンと母親のアリソンを、ジョスリンのスタッフはいつもあたたかく支えてきました。彼らに助けられながらショーンの病気に向き合ってきたアリソンは、いつかジョスリンで糖尿病と闘う医師や研究者を手伝う仕事をしたいと思うようになったそうです。念願叶ってジョスリンで秘書として働くようになったアリソンは、私たち研究者をいつも全力でサポートしてくれます。ジョスリンでは、医師も病院スタッフも研究者も患者さんもひとつの家族のようにお互いを支え合って、糖尿病という病気に立ち向かっています。

ショーンは数日後に亡くなりました。アリソンたち家族の意向で、ショーンの臓器の一部は糖尿病治療に役立てるため、1型糖尿病患者のサンプルとしてジョスリンに寄付されました。そのサンプルを使って私たち研究者は研究をします。医師は研究成果を治療につなげていきます。アリソンはそんな私たちを秘書として支えます。人が人を思い合うことでできるこのつながりがこそが、世界最古の糖尿病研究所であるジョスリンが今なお世界をリードする研究成果を次々と発表している理由なのでしょう。実験室にこもって実験ばかりして学会で研究者たちとばかり議論をしていると、誰のためにどんな思いで自分は研究をしているのか？そんな単純なことがしばしば見えなくなることがあります。ジョスリンでの豊かで愛に満ちた研究生生活を忘れず、今後も様々な人と心を交わしてハートのある研究をしていきたいと思えます。



Lab member

## ウメオ大学留学を終えて

北海道大学病院 研修医  
(北大歯46期卒)

高橋 静香

2月初めに行われる歯科医師国家試験を終えた直後から3週間、卒業までの最後の学生の春休みを利用してスウェーデンのウメオ大学に留学しました。ウメオという町は北緯63度に位置し、スウェーデンという国のイメージの通り、札幌生まれ・育ちの私にとってもとても寒いところでした。

まずは、3週間のプログラムについてです。ほとんどは学生実習の見学で、学生や先生、患者さんとお話したり、治療の補助などをしたりします。それに加え、空きコマを利用して自分の興味のある分野の見学や講義を受けることもできました。これらを通して感じた、ウメオ大学と日本の歯学部を比較して最も異なる点は、学生診療室の有無によるもので、これによりいくつかの違いが見えてきました。

第一に教育システムの違いです。ウメオ大学の学生診療室では、学生が多くの患者さんを持ち、治療を初診からその終了まで責任を持って行うことで、早期から歯科医師としての自覚のもと治療に当たり、問題解決に向けた行動力を大きく伸ばすことができます。北大病院内の診

療室で先生について学ぶことが主体の私たちの実習では、数えきれないほど多くの先生について、治療方法や患者さんとの接し方、それらの工夫を直接学び吸収していくことができます。両者は全く異なる方向からの教育でありそれぞれの利点があると思いました。

第二に歯科治療に対する国民の意識の違いです。スウェーデンの患者さんは歯を削ることや抜くこと、治療時間が長くなることに対する抵抗が、日本の患者さんよりも低いように私は感じました。学生診療室での治療は、指導医の先生もあまり来ず、何時間も要しますが、価格は通常の半分以下と非常に安く済みます。これらの要素を日本人に置き換えてみると、「少し高くなっても時間は短く安心できる治療を」と反対のほうを選ぶ人が多くなり、学生診療室自体が成り立たないのではないかと思われました。

次に、文化についてです。スウェーデンは移民の多い国で、さらにウメオ大学には多くの国から交換留学生を受け入れていることもあり、人種の多様性とその国民の寛容さに驚かされました。今回の留学でできた友達が「みんな違っ



同じく交換留学生のなかよくなった台湾人学生と  
FIKA (coffee breakのようなもの)



去年日本に来ていた友達と再会

て、みんな美しい」と言っていました。本当にその考え方が自然に生まれるほど、皆が個性を出して自分を強く持って生きているように見えました。アジア人内、ましてや日本人内での違いにとられることなどちっぽけで、個性を生かすことが1番美しいのだ、という意識がさらに強くなりました。

今まで、海外の歯科治療や教育システムを学んだ経験はありませんでしたが、今回頂いたこ

とで、初めて外から自分の国・大学の歯科治療を見つめなおすことが出来ました。さらに、人種の多様化の進んだ国で長期間過ごしたことで、さらに国際的な視野で物事を捉えられるようになったと感じています。このような機会を与えてくださった2つの大学と、支えてくださった先生方、事務の方々に心より感謝申し上げます。

## スウェーデン王国ウメオ大学短期留学の報告

北海道大学病院 研修医  
(北大歯46期卒)

小林 博 和

2018年2月7日から2月28日までの22日間、スウェーデン王国ウメオ大学歯学部での歯学教育・臨床実習体験短期研修プログラムに参加しました。本プログラムは北海道大学歯学部とウメオ大学歯学部の間で互いに2名ずつ学生を派遣しあい、それぞれの大学の教育や研修を体験するという趣旨で行われています。私にとって今回が人生で初めての海外留学であり、非常に多くの驚きと感動を得ることができました。ここに思い出を振り返りながら報告したいと思います。

本プログラムの参加学生募集に関する案内が掲示されたのは2017年8月末のことでしたが、応募するきっかけとなった出来事は1年ほど前に遡ります。2016年10月下旬、学友会運営委員長として仕事をしていた縁で学部長(当時)の横山教授から本学を訪れる交換留学生の歓迎会に参加しないかと声をかけていただいたことが全ての始まりでした。多少なりとも英語を話すことができ、留学生との交流にも興味が湧いたため喜んで歓迎会に参加してみた結果、想像以上に刺激的で興味深い体験をすることができました。その年の北大代表として45期卒の丸岡先生、三浦先生が派遣されるということを知り、来年は自分が代表として選ばれたいと強く思っ

たことを覚えています。

次年度の募集はまだかと首を長くして待っている間に時は流れ、2017年8月になりました。いよいよ参加学生募集の案内が掲示されたのです。そしてその日の放課後、臨床教育部門の井上教授の部屋を訪ね応募の意思を表明しました。その結果幸運にも北大代表として選ばれることになり、晴れて留学プログラムへの参加が決まりました。その後は航空券の予約や旅券の発行、現地で生活する学生寮の予約などの準備を進めながらウメオ大から来た学生達との交流を行い、国家試験勉強と並行してスウェーデン語の勉強も始めました。スウェーデンでは英語が広く話されており、英語だけでもコミュニケーションには困らないという話は聞いていましたが、渡航先の国に対する最低限の礼儀として、挨拶と簡単な会話くらいは身に付けておくべきだと思ったからです。そのうち徐々に勉強の比重が国家試験から語学へと傾いていき、毎日スウェーデン語を勉強しているうちに気づけば歯科医師国家試験が目の前に迫っていました。そして2月4日に国家試験を受験し終え、一息つく間もなくスウェーデンへと飛び立つことになったのです。

現地では大学が一棟丸ごと借り上げて学生寮

として提供している共同キッチンのアパートが生活の拠点となりましたが、その生活は決して便利とはいえないものでした。そもそも実家で生活している私にとって一人暮らし自体が未知の体験であり、あろうことか初めての一人暮らしが海外という非常に無謀な挑戦になってしまったからです。しかし異国での自炊生活も実際やってみれば案外楽しいもので、1週間も経った頃にはすっかり現地での生活に順応できていました。ウメオ大学はヨーロッパ圏内やその他の地域からの留学生を積極的に受け入れている大学であり、私が入居したアパートにも多くの留学生が住んでいました。彼らとキッチンで出会い仲良くなり、互いの国の食べ物を交換し合ったりして過ごしているうちに不便なはずの自炊生活が楽しい日々へと変わっていきました。

大学病院での実習見学も非常に興味深い経験でした。ウメオ大における臨床実習は学生が主体となって診療を行うstudent clinicで行われます。そこでは学生が自ら担当患者を持ち、初診から始まり各種検査そして診断、治療計画の立案および治療後の予後判定まで一貫して自分たちで行っています。もちろん監督の教官は在室しており要所での確かなアドバイスを与えますが、実際に手を動かして治療に携わるのは学生達でした。そのような実習スタイルのためウメオ大学では教官の治療を見学するという形式の実習はほとんど行われず、模型実習で基本的な主義を身に付けたらすぐにstudent clinicで実際の患者さんに対する診療を始めるそうです。北大では教官の診療見学や補助が主体となり、運が悪ければバキュームを持っているだけで1日が終わることもありました。ウメオ大の方法は全く逆のものでした。ウメオ大のように早くから自分の担当患者を持ち一貫した診療を行う教育方法は単に手技を身につけるだけではなく、臨床家としての責任感を養うという点において極めて重要だと思われます。これらの内容は北大よりもウメオ大の方が優れている点であると感じました。しかし、同時に教官の診療を見学する機会が少ないことがある種の弊害をもたらしているようにも見えました。その例の一

つが、正しい診療姿勢や器具の持ち方が身につけておらず、自己流の癖がついている学生が比較的多く認められたことです。姿勢や器具の持ち方はともかく、3ステップ法によるCR充填を行う際にエッチングの手順を飛ばしている学生がいたことには驚きました。北大のように何度も見学しながら説明を受けていけばそのようなことは防げるので、正確な手技を覚えるという点においては北大の実習方法が優れていると言えるでしょう。

この他、ウメオ大の歯学部生や教官と歯科医療について意見交換することができたのも大きな経験でした。慣れない英語で自分の意見を表現するために頭の中で考えを整理するうちに、自分が歯科医療についてどのような考えを持っているかを客観的に見つめなおすことができたからです。特に仲良くしていた学生とは1時間近く歯科医療に関するディスカッションをする機会があり、この経験を通じて自分自身が持つ歯科医療に対する考えをはっきりと認識するとともに、他人の考えを吸収して視野を大きく広げることができました。スウェーデンならではといった意見もいくつか聞くことができ、臨床家として生きていく上で大きな材料となることと思います。

一つ一つ思い出して書いていくととてもこの紙面に載せきれない文字数になってしまうのでそろそろ筆を置こうと思いますが、最後に留学生生活全体を振り返ってみると、全てが新しいものに囲まれた環境での生活は私の価値観の幅を大きく広げたと同時により深く掘り下げてくれたと感じます。本プログラムは北海道大学の教育理念の中の「全人教育」、「国際性の涵養」を体現するものと言っても過言ではありませんでした。この貴重な体験は、今後一社会人として人と向き合い生きていく上できっと大きな糧となってくれることでしょう。

最後に、まさに大学生活の最後を締めくくるにふさわしい本プログラムへ参加するにあたり、比類なきご支援を賜った先生方や事務の方々、そして快く送り出してくれた両親に心より感謝の意を表して筆を置かせていただきます。ご高覧ありがとうございます。ごさいます。

# 退任ご挨拶

## 退任にあたって



北海道大学名誉教授  
(歯科矯正学教室 前教授)

飯田 順一郎

平成11年11月1日に北海道大学に赴任して以来18年5ヶ月が経ち、本年3月末日をもって北海道大学大学院歯学研究院を定年退任いたしました。これまで永きにわたりご芳情を賜わり誠にありがとうございました。

18年前、東京から赴任した初日の空はすっきりと晴れわたった快晴で、13条門を入った瞬間に、金色に輝く黄葉が真っ盛りの銀杏並木が私を迎えてくれました。その感動的な瞬間を昨日の出来事のように覚えています。銀杏だけではなく、気温の高低差がそうさせるのか、朱色に輝く楓の紅葉の鮮やかさも関東では見ることでないもので、銀杏の黄葉との見事な色合いのバランスに唯々びっくりしていたことを思い出します。私の部屋はその銀杏並木を見下ろすところにあるものですから、毎年11月には銀杏の黄葉、楓の紅葉を楽しんで18年間を過ごさせていただきました。

もう一つ赴任当初に感じたことといえば、学生さんがすれ違いざまに「おはようございます」あるいは「こんにちは」と元気よく挨拶してくれることでした。教員と学生との距離感がそれまで勤務していた他の大学と比べると有意に近いと感じるものでした。これも北海道大学の校風の一つではないかと感じるどころです。北大の基本的教育理念はフロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視の4つであることは周知のことですが、それに随って歯学部のカリキュラムの中に「全人教育」という科目があります。それは2つの学年の学生5～6人が入り混じって講師以上の教員のもとに集まり、教員の専門領域にこだわらず、1時間半の一コマの時間、教員と唯々お話をするだけで良

いという20年間ぐらい続いている授業です。私も「全人教育」の授業を担当していましたが、別にテーマを設けるわけでもなく、その時点でトピックとなっている社会問題も含めて学生と自由に意見交換をするという形で話を進め、結論もなく終わるというものでした。この授業では学生から教わることも多く、私にとっても有意義な時間でした。歯学部におけるこの授業の存在は学生と教員の距離感を縮めることに大きく貢献しているものと考えています。

もう一つの感慨深い、また思い出深い文化としては、事があるたびに肩を組んで合唱する「都ぞ弥生」があります。中でも卒業式後の謝恩会で、卒業生と教員が輪になって肩を組み、前口上の後にみんなで歌う「都ぞ弥生」は、卒業生を送り出すのにふさわしいイベントです。「人の世の 清き国ぞとあこがれぬ」の一節に来ると、毎年のことながら涙腺が緩んでしまうことが多い瞬間です。

赴任当初に感じた思い出だけでなく、在職していた18年余りの間には色々なことがありました。歯学部、歯学研究科、歯学部附属病院はこの18年間で激動したと言っても良いでしょう。教授に就任した翌年である平成12年の4月に大学院重点化が成され、学部の学生教育を中心としていた歯学部主体の組織から、大学院生の教育に主体を置く大学院歯学研究科を中心とする組織に衣替えされました。また平成15年4月に歯学部附属病院と医学部附属病院が統合されて北海道大学病院となり、それまでの歯学部附属病院は北海道大学病院歯科診療センターと呼ばれるようになりました。巨大なタンカーに小さな漁船が飲み込まれるような状況の病院の統合

です。当時は故戸塚靖則教授が研究科長、故川崎貴生教授が歯学部付属病院長であった頃でしたが、その後に引き続き歯科担当副病院長を勤められた福島和昭教授、中村太保教授も含めてこれら先生方のご苦勞は尋常なものではなかったものと拝察いたします。その1年後の平成16年には北海道大学の法人化が成されました。すなわち全国的な動きでしたが北海道大学も文部科学省直属の組織であったものから国立大学法人に組織替えされました。6年ごとの中期計画を立て、その目標の実現に向かって着実に成果をあげるように毎年評価されるという活動の規範が生じ、研究、教育、臨床、その他において数字で表される業績が多く求められるようになってきました。そして平成25年には歯科診療センターの移転が実現されました。その経緯ですが、先ほど述べた13条門を入った銀杏並木に面していた歯学部付属病院、後の北大病院歯科診療センターは、建物の老朽化が進み耐震補強工事が必要になりました。そこで、その機能を一時他の場所に移してビルの補強工事をしてそ

こに戻るか、新しいビルを新築して移転するかなど、幾つかの案を慎重に検討した結果、15条門を入ったところ、すなわち医科外来棟の北側に接した場所に6階建ての新たな建物を外来新棟として新築することになったわけです。この新築、移転の時期に歯科担当の副病院長を拝命して事業に携わったことは貴重な経験でした。平成15年に歯学部付属病院と医学部付属病院が統合されたものの、かなり離れた別棟で治療を行っている歯科診療センターであったものが、統合10年目である平成25年に、名実ともに北大病院の中で医科と協力し合いながら診療に当たる歯科診療センターとして機能しました。

このような激動の18年を大過なく務めることができたことは感慨無量です。皆様方に賜ったご厚情に心から感謝いたしております。誠にありがとうございました。今後の北海道大学大学院歯学研究院、歯学院、歯学部、並びに北海道大学病院歯科診療センターの益々の発展を心から祈念しております。

## 教育は難しいー退職にあたってー



北海道大学名誉教授  
(細胞分子薬理学教室 前教授)

鈴木 邦 明

皆様こんにちは。薬理学を担当していた鈴木です。3月末で定年退職しました。退職にあたり、学生教育についての感想を書かせていただきます。教育はその対象によって、目的も異なることでしょう。歯学部の学生に対する薬理学教育は歯科医師になる学生に対して必須の内容を含むので、覚えてもらうことも含めた教育であり、役に立つ教育である必要があります。そのためには、理解しやすい内容に整理して、網羅的に教える必要があります。学生には薬理学

が好きか嫌いにかかわらず、あるレベルに到達してもらわなければなりません。とは言っても、好きこそものの上手なれ、興味を持たせることも重要な要素になるかと思います。私の薬理学教育に対するイメージは、このようなものでありました。

大学教員になってすぐの頃、教授から「教育は難しいよ、わかるのに10年かかる」と言われました。講義を担当したのは、助教授に昇任したときからです。初めて講義をした年には、

何もないところから始めたので、40回くらいの講義の準備のためにその年のほとんどの時間を使い、こちらも必死という状態でした。わかりやすく教えるためには、図や表も大事だと考え、さまざまな教科書から適切な図や表を探しては整理して、プリントを作り資料として学生に配布しました。多数の教科書を参考に、自分がベストと思う講義内容のノートを作りました。講義はまとめたノートを見ながらの口述です。大事な箇所は黒板に筆記したので、ひたすらしゃべりながら、なおかつ、ずっと黒板に書きまくっているような講義でした。

ちょうどこの頃から、学生による授業評価が始まりました。ひたすら話して黒板に書きまくる私の講義は、高い評価を受けました。授業評価担当の教授が、どんな講義をしているのか、見に来たくらいです。学生の評価のコメントで覚えているのは、「板書を書き留めていくのが大変だったが、先生の講義のノートは私の宝物です」。こういうことで講義を行い、準備は大変でしたが、講義が難しいとは思いませんでした。

私は、学生にとってより良い講義にしたいと思い、毎年、工夫を重ねました。板書に忙しいと考える時間をとれないと思い、図表だけでなく、講義内容のプリントも作成して学生に配布するようにしました。パワーポイントを活用して、図表や講義プリントの内容を常に見せながら講義を進めるように準備しました。至れり尽くせりで作業を軽減することにより、学生に考えてもらいたいと思いました。自分では学生のことを思って改良を加えましたが、皮肉にも私の講義に対する学生の評価はだんだんと平均的なものになっていき、私は次第に、教育は難しいと感じるようになっていきました。

今になって考えると、学生は、講義中、適度

な作業を常に与えられている方が講義終了後の充実感が高いのではないかと思います。それと、私自身、次第に熱意が表面に出なくなり、講義を進めるテクニカルなことに注意を払って自己満足する、平板な講義になってきたのかもしれないと、思っています。最近では、教員が教育に対するさまざまな考え方や技術を身につけることが求められ、学生の学ぶ意欲を引き出すための教育方法がいろいろと取り入れられています。私自身、そういう方向で進んできたのですが、本当に良い教育をするにはどうしたらよいのか、考えてしまいます。定年を迎える頃に、教育の難しさを知ることになったという、お粗末な話でした。

私は、歯学部の学生にとって薬理学が必要であるということから、知識を身につけてもらうことを重視して教育を行ってきました。その目的は、理解しやすい講義をし、試験を行うことにより、必要なレベルまで達成できると思います。しかし、もっと広い意味での教育の目標があるのではないかと。私は薬理学を本当に面白い学問だと思っており、そのことを学生に伝えたいと思って講義をしてきたつもりです。しかし、自分が学生のときに薬理学を面白いと感じたかということ、必ずしもそうではありません。本当に薬理学の面白さを理解したのは、学生に教えるために、時間をかけて体系的に薬理学に取り組んだからで、その結果、面白いと思えるようになったという気がします。そう考えると、面白いと思わせて自分で学び始めるきっかけを与えることが教育の本質かと思いますが、どうすれば、効率よくそれができるのか。やはり、難しいですね。退職後まだ3ヶ月になりませんが、時間に余裕ができたなら、教育に関する専門家の本を読みたいと思っています。



名誉教授

内 山 洋 一

(享年84歳)

内山洋一先生は、平成29年10月25日ご逝去されました。先生は、昭和9年新潟県に生まれ、昭和33年3月東京医科歯科大学歯学部を卒業後、同年6月同大学歯学部助手に採用され、昭和40年11月歯学博士の学位を授与されました。その後、東北大学歯学部助教授を経て、昭和46年4月北海道大学歯学部教授（歯科補綴学第二講座）に就任されました。平成9年3月停年退官されるまで、学生、大学院生の教育や卒後研修による人材の育成、博識と先見性、柔軟な発想力による数々の先駆的な研究成果、歯科臨床の発展への寄与など、多くの功績を残されました。また、北海道大学歯学部附属病院長、北海道大学評議員ほか、各種委員会委員を務められ、本学の管理運営に尽力されました。

専門である冠橋義歯補綴学では、若い頃からその卓越した治療手技は広く知られ、自ら素晴らしい臨床実績を残ただけでなく、歯科界の治療技術レベルの向上に向けて、後進の技術教育に力を注がれました。一方で、術者の手技の力量の個人差に左右されることのない歯科医療の質の向上の必要性、そして歯科医療の省力化の重要性を早くから認識し、工業界の機械化や自動化技術の導入を提唱され、工学部や医学部、

産業界と共同で研究開発に取り組みられました。その成果は、3年前保険収載されるに至ったCAD/CAM冠など、歯科における現在のCAD/CAM技術の普及に繋がり、その先駆者として高く評価されています。

学外においては、日本学術会議咬合学研究連絡委員会委員、歯科医師国家試験委員、医療関係者審議会専門委員、歯科医師部会員、学術審議会専門委員、厚生省医療技術参与を務め、学会においては、日本補綴歯科学会会長、第96回学術大会長、日本医用歯科機器学会会長、日本接着歯学会副会長、日本歯科審美学会副会長などを務め、我が国の歯科医学の発展に大きく貢献されました。

北大退官後も、年2回の教室の同門会の集まりでは、歯科に残された問題点の指摘や研究に関するアイデアをお話しされるなど衰えぬ思考力を見せていただけていました。また、平成25年まで北海道医療大学客員教授、非常勤講師として外来診療、教育、研究を続けられ、生涯、歯科治療や研究、教育への情熱を持ち続けられました。

ここに生前のご功績を称え、心より哀悼の意を表します。

## 北海道大学病院歯科診療センターのご案内

最近、歯に関して気になることはありませんか？ もしあれば、北海道大学病院の歯科外来をご受診下さい（健康保険証をご持参下さい）。皆様の受診をお待ちしております。定期的な歯の健康診査や歯石の除去、歯に関する相談だけでも歓迎いたします。

なお、当院では平成26年6月から新来予約制を導入しております。受診される場合は原則として事前予約が必要です。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

### ○事前予約の方法

- ・電話にて予約する

〈予約受付専用電話番号〉 011-706-7733

〈予約受付時間〉 平日9時00分～16時00分（なお、翌日の予約受付は15時00分まで）

※矯正歯科については、電話を受けた7日以降の予約となります。

※紹介状に記載されている当該歯科医師の診察を受けられない場合もありますので、ご了承下さい。

※電話予約の際は以下の内容を確認させていただきます。

1. 氏名
2. 性別
3. 生年月日
4. 連絡先（住所・電話番号）
5. 症状（診療科）
6. その他（当院での受診歴や紹介状の有無など）

※紹介状がなくとも予約受診できますが、その場合、初診料の他に特定療養費制度に基づく特別の料金として、3,240円を自費（保険外料金）でお支払いいただくこととなりますので、ご了承願います。

### ○歯科診療センターのご案内

#### ☆第一診療室（2階）

予診室

#### ☆第二診療室（2階）

小児・障害者歯科（TEL 706-4355） 小児と知的障害者の歯科治療と口腔管理

#### ☆第三診療室（3階）

口腔内科（TEL 706-4349）

口の粘膜の病気の治療、口腔ケア

口腔外科（TEL 706-4349）

顎や口の中の外科治療

矯正歯科（TEL 706-4352）

歯ならびやかみ合わせの治療

歯科放射線科（TEL 706-4356）

放射線治療前後の口の中の管理

顎関節治療部門（TEL 706-4386）

顎関節症の治療

顎口腔機能治療部門（TEL 706-4388）

顎変形症、口蓋裂患者の総合的治療

口腔インプラント治療部門（TEL 706-4391）

人工歯根による歯の回復

歯科手術センター・歯科麻酔科（TEL 706-4345）

歯科治療のための麻酔管理、ペインクリニック

#### ☆第四診療室（4階）

歯冠修復科（TEL 706-4346）

新しい材料を用いた、むし歯の治療

義歯補綴科（TEL 706-4346）

入れ歯による、かみ合わせの回復

高齢者歯科（TEL 706-4358）

高齢者の歯の治療、口腔管理

口腔総合治療部

#### ☆第五診療室（5階）

予防歯科（TEL 706-4342）

定期歯科健診と予防処置、口腔ケア全般

歯周・歯内療法科（TEL 706-4343）

歯の根の治療、歯周病の治療

冠橋義歯補綴科（TEL 706-4343）

冠、ブリッジによる、かみ合わせの回復

口腔総合治療部

☆グループ系専門外来

口臭外来（予防歯科 TEL 706-4342）

歯ぎしり外来（歯周・歯内療法科 TEL 706-4343）

摂食、嚥下機能外来（口腔内科 TEL 706-4349）

審美歯科外来（歯冠修復科 TEL 706-4346）

口臭でお悩みの方

歯ぎしり、くいしばりでお悩みの方

摂食、嚥下障害のある患者さん

歯や歯ぐきの着色、変色の治療

## 編 集 後 記

今年も広報誌第18号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。昨年も、そして一昨年も、そしてその前の編集後記でも書きましたが、例年と同じにならないようにと・・・思いながらも、やはり今年も同じ内容と企画になってしまいました。来年こそ新たな企画を入れたいと思いますので、ご提案等がございましたら、巻末に挟み込みました葉書にて当委員会までお知らせ下さい。

今年も歯学部学生に新入生合宿研修の原稿を依頼したところ、快く引き受けてくれました。ありがとうございました。国内・外で北大歯学部の卒業生・学生が様々な場所で活躍していることを本当に頼もしく、そして嬉しく思います。原稿を送ってくれた皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

(2018年 8月 広報委員会委員長 土門卓文)

この広報誌の編集を微力ながら担当させていただいて参りました。2017年は歯学部も50周年を迎え一区切りしました。今後はさらなる発展を目指して行くことと思います。広報誌もその発展を支えていきたいと思ひます。そのためにも皆様により多くのことを広報して行ければと思っております。今後ともよろしくお願ひします。

(広報委員会編集人 金子知生)



郵便はがき

62円切手  
をお貼り下  
さい

060-8586

(受取人)

札幌市北区北十三条西七丁目

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部

広報委員会  
行

広報誌へのご意見・ご要望等をお書き下さい

差し支えなければご連絡先をお書き下さい

お名前 \_\_\_\_\_

ご住所 〒 \_\_\_\_\_

電 話 \_\_\_\_\_



北海道大学歯学部 創立50周年記念祝賀会



**北海道大学大学院歯学研究院・歯学院・歯学部・歯科診療センター広報**

第18号 2018年（平成30年）8月発行  
北海道大学大学院歯学研究院・広報委員会

編集人 兼平 孝・金子 知生  
発行人 土門 卓文  
印刷・製本 株式会社正文舎